

JTB 旅いくファームプログラム参加者の養育環境特性 ～第二次、第三次産業プログラム参加者との比較から～

○宮本康司（東京家政大学）、池田まさみ（十文字学園女子大学）、安藤玲子（金城学院大学）、大竹千広（JTB 法人東京）、遊佐知広（JTB 法人東京）

キーワード：旅いくファーム、旅いくプログラム、旅いくアンケート

【はじめに】

新学習指導要領では、知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」を育むことを掲げている。そこで、JTB 法人東京は子どもの「社会に生きる力」向上を目指し、旅で出会う本物体験を活かした「旅いくプログラム」群開発のため、大学チームとの共同研究をすすめてきた。その中で、「保護者の生きる力」8要素、「子どもの生きる力」6要素から成る「旅いく版『生きる力』尺度」（保護者用 24 項目、子ども用 18 項目）を開発した。この尺度を用いたアンケートを実施し、結果をフィードバックすることにより、参加者は要素ごとに生きる力の現状を把握することが可能となった。一方開発者にとっては、生きる力のような要因がプログラムの選択と関わるのかを明らかにできることとなった。

【方法】

2011 年度の「旅いくファームプログラム（稲刈り：第一次産業体験）」参加者のアンケートの回答値（1：まったくあてはまらない～4：よくあてはまる）について、他のプログラム（「消しゴム作りプログラム（第二次産業体験）」、「鉄道体験プログラム（第三次産業体験）」）の参加者の回答値との比較を行った。

【結果】

保護者のアンケート結果を図 1 に示す。稲刈りプログラム参加者は、「情報収集・整理」「論理性」「対処能力」「対人効力」「自他の子の世話」の 5 要素で最も高い値を示した。また、その 5 要素では、プログラム間で同様の順位傾向がみられた。総じて生きる力の高い保護者のいる家庭では稲刈りプログラムを選択する傾向が示された。一方、子どもについては保護者とは異なる順位傾向（平均値が最下位である要素もある等）が示された。

【考察】

保護者が備えている「生きる力」によって、選択するプログラムが異なることが明らかになった。今後、生きる力の各要素の向上に対応するプログラム群を開発すること、また、プログラム提供者は、参加者自身が向上させたいと考える要素に対応するプログラムを推奨できるシステムを構築することが重要である。

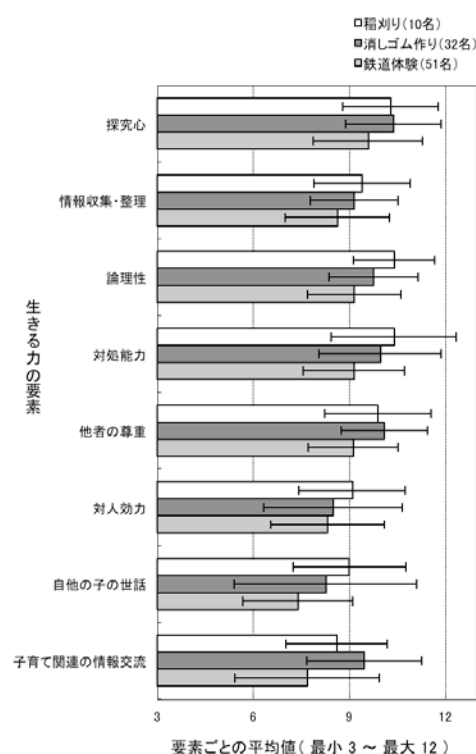


図 1：8 要素別にみた保護者の「生きる力」に関するプログラム間での比較